

## 子供の自主性、将来選択

### 1. 教育を考える一言

“What do YOU want to do?”

### 2. 背景

アメリカの中学校に通っていた時に、第二言語の授業を履修するために時間割のことで相談する際に学校カウンセラーに言われた言葉です。私は親に日本ではスペイン語よりフランス語の方が主流だという理由でフランス語にするように言われたのですが、先生にこの質問をされ驚いた覚えがあります。学校の先生や親にはっきりと自分のやりたいことを聞かれた経験がそれまでなかったので、戸惑ったと同時に私の意見を大事にしてくれるのだと感動しました。

### 3. 考察

概ね子供は親や先生に何かをするよう言われた時は嫌でも従うしかなく、特に進路に関わるような重要な決めごとは大人が強要することもあります。自分も大学受験の時に行きたかった学部より違う学部の方が定員が多く受かりやすいと塾の先生や親に後者を強く勧められ、従いました。大人は子供の自主性を育て、自分の考えを持った大人に育てようと言いますが、子供が考え、判断出来る場面は学校と家の中に限られています。学習指導要領にも生徒が自ら考え主体的に判断し解決出来るよう指導すると書かれていますが、それはやはり授業内に留まっていて、生徒が自分で決断することに積極的になっても、社会ではまだまだ決定権がありません。「生きる力」は社会に出た時に必要なものなので、まだ子供であるからと決めつけなくてもっと生徒自身の考えを引き出す必要があります。

日本の高校にも非常勤の学校カウンセラーはいましたが、一回も見た事はありませんでした。生徒に悩み事があっても全く知らないカウンセラーに相談に行くのは抵抗があると思います。その点、私がいたアメリカの中学校ではカウンセラーが数人常駐していて、生徒全員が数回はカウンセラーと関わる機会が設けられていました。親や先生に言いにくい事でも少し違う立場にいるカウンセラーには相談できると話しに行く生徒も多くいました。私自身も、カウンセラーと話したことがあり良い人柄だということがわかっていたので言われた言葉が印象的だったという面もあります。日本の学生は自分の意見や悩みを言うのが苦手な人が多いので、カウンセラーを効果的に活用するのならアメリカのようにカウンセラーと話す機会や話しやすくなる工夫が必要です。様々な試みを通して生徒が発言することに慣れれば自分で考える力や決断力も育つと思います。

### 参考文献

文部科学省『高等学校学習指導要領解説総則編』東山書房、2009年

橋本紀子、木村元、小林千枝子、中の新之祐編『青年の社会的自立と教育』大月書店、2011年